2009 年 5 月～

人間歯科学研究会報

人間歯科学研究会
〒567-0883　茨木市大手町 7-26
FAX　０７２－６２６－６５１９
E-mail yoshihara@gold.ocn.ne.jp

― アンビリーバボー ―

信じられない真実の話

新型インフルエンザが流行する前の 3 月 10 日の早朝 4 時、スペイン風邪の時のようにウイルスが大流行し、死者が多数出ている夢を見て目が覚め、高野山ゆの里の飲泉「月のしずく」を飲んで再び眠りに入った。

ところが、胸苦しく冷や汗が出るほどの異様な空気にうなされながら長い夢を見た。

お坊さんが枕元で合掌しながら 6 人通り過ぎ、最後にひときわ大きなお坊さんが合掌しながら「これで入魂・開眼を終わりました」という。おもわず何に入魂してくださったのか聞くと、静かな声で「息子さんが彫刻したハトが恒温気の奥で眠ったままになっている・・・このままでは哀れなので入魂しました、末永く大事にしてあげなさい」とのこと。その後気分も落ち着きぐっすりと眠りに入った。

朝食後、診療室にある恒温器の中を見ると一番奥に張り付くようにハトのデコイがあった。4 月 20 日生まれの息子が 20 年以上前に作製したものでお坊さんがおっしゃられていた通り左目が外れて悲しそうな顔をしていた。これからは元気でいられるように恒温器の外に出すと、生き生きとして今にも飛び立ちそうに見えた。

六地蔵ならぬ七地蔵だったが、水掛地蔵のいる高野山からの使いだったのかゆの里の飲泉を飲むたびに心救われるような気持ちになる。

不思議な出会い

一週間後、何故か無性に長野の「善光寺」にお参りに行きたくなった。40 年ぶりのことになる。

4 月 5 日から 7 年に 1 度の盛儀“善光寺御開帳”で、高速道路も一律 1,000 円になるといこともあり、全国から身動きできないほどたくさんの人が集まる

とのこと。その前に是非行こうということになった。

御開帳前とはいえ、さすがに善光寺はお参りの人が多く、久しぶりに興奮した。

血の気が引くほど驚いたのは、山門を入ってすぐ右に実物大のお地蔵さんが 6 体並んでいて、その六地蔵の最後にひときわ大きな長寿地蔵が立っていたことだ。高野山だとばかりおもっていた 7 人のお坊さんは、なんと長野の善光寺からやってきたのだ。これで急に善光寺にお参りしたくなった理由がはっきりとした。気付かぬうちにお迎えがあったのだ。

更に不思議なことは続く・・・。見知らぬ紳士が寄ってきて、山門正面に掲げられている扁額の「善光寺」という文字の中にハトが何羽いるか知っているかという。そして、その由来を丁寧に説明してくれた。たくさんの人がいる中で何故私たち親子なのか、なんとも不思議なできごとだった。これで息子の彫刻したハトはこの善光寺の分身となった証拠でもあるなと感じた。おもわずその紳士にも合掌した。

しばらく立ち止まって見送ったが、他の人に声をかける様子も無く立ち去っていった。